



『終わりになき侵略者との闘い
—増え続ける外来生物』

五箇公一 著, 「THE PAGE」編集部 編

2017年7月 小学館クリエイティブ発行
定価(本体1,400円+税)

中澤美菜・浅川満彦(酪農学園大学獣医学群)

本文を作成している2018年11月は、約2か月前から開始された「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム(以下、コアカリ)」準拠の「野生動物学」(本学では野生動物医学という名称)の佳境に入っている時期である。この中には「外来種」のコマもあり、共用試験では外来種の定義と現状、その問題背景などの基本事項と、人間生活や自然生態系への影響とその影響回避のための予防手段など幅広い項目から出題される。しかし、一コマ90分の授業内ですべてを教育することはほぼ不可能で、独習が前提となる。そのため、網羅的で最新、かつ、大学初年程度の学生さんが容易に理解できる参考書が必要となる。「野生動物学」の受講者は4年生であるが、獣医学部学生の多くは外来種問題の基盤となる基礎的な生態学などの知識は、高校生物で止まっている。そのようなことから、「大学初年程度」とした。

そのようなことを念頭に、本書を読み込んだ。本書に登場する外来性動物として、哺乳類の他、扁形動物(ニューギニアヤリガタウズムシ)、腹足類(アフリカマイマイ、スクミリンゴガイ)、甲殻類(ミステリークレイフィッシュ)、クモ類(セアカゴケグモ)、昆虫類(アルゼンチンアリーヒアリ、ツマアカスズメバチ、セイヨウオオマルハナバチ、外国産クワガタムシ)、魚類(アリゲーター・ガー、ピラニア)、両生爬虫類(オオヒキガエル、チュウゴクオオサンショウウオ、北米原産のグリーンアノールやミシシッピアカミミガメ)の事例が包含された。さらに、植物やカエルツボカビ菌、爬虫類・昆虫類に寄生するダニ類、広東住血線虫などの病原生物にも言及されていた。一方、コアカリの教科書内で事例紹介しているのはマングース、台湾ザル、ヤギ、カイウサギ、イエネコなど哺乳類中心である。獣医学の野生動物学ということ考えると、止むを得ないのは理解できるものの、外来種が多様な生物レベルで侵食していることの理解が初学者に必須である。その点、広範な生物を扱った本書の試みは評価できよう。法的には明治期以降に日本に入った種を「外来生物」としているが、本書では江戸期からそれ以前に入っていたスズメやクサガメ

なども、その自然生態系での影響を論考している点も注目された。ある土地に生息する生物は在来種と外来種に大別される。そして、在来種の由来をその土地の歴史（地史）と関連付けて論考する学問が生物地理学である。評者は、外来種問題を語るには、生物地理学が理解されていることが必要と考えている。端的に表現すると、その学理上のルールを無視して生息・分布を果たしたのが外来種であり、よって、外来種は生物地理学の研究対象としないと考える研究者もいる程である。本書でも、この学問について言及されていたが、そのような学理面での話ではなく、日本の生物地理学を成立させた立役者の一人、渡瀬庄三郎がマングース導入およびアメリカザリガニやウシガエルの利用推進を行ったとの記述であった。実に皮肉なことである。また、宿主-寄生体関係の生物地理に魅力を感じ、寄生虫学を一生の仕事にした評者には、辛い歴史的事実でもあった。

ところで、多くの高校生が地学（地史の初歩）を学ばないで、大学進学している現状では、生物地理のセンスを涵養している若者がどれ程いるのか懸念する。繰り返しになるが、生物地理不理解の頭脳では在来種由来を会得しないし、そうなると、その反対概念の外来種自体も、その問題の根深さ・深刻さへの真の理解も難しい。さて、自然生態系保全のというアプローチを志向するこのゼミ生新人が、本書をどのように読みこなしたのであろうか。下記に彼女からの感想をそのまま掲載したので、この点も検証をして欲しい。

（浅川 文貞）

この本では現在、問題視され、また年々増えていく外来生物の問題について書かれている。“本来生物は、新しい生息地を求めて移動をしても山や谷、川や海洋といった、それぞれの生物にとって超えられない障壁によって区切られてきた。また、生物が一代で移動できる距離も限られていた。しかし、人が文明の発達とともに多くの生物を意図的あるいは非意図的に持ち運び、短時間で広範囲に広げていく。それが現代の外来生物問題につながっている”とこの本の著者は導入で語っている。つまり、この外来生物の問題は人が自分で自分の首を絞めて騒いでいるというようにも解釈できる。

導入の後は、代表的な外来生物とその生物によって引き起こされる問題、そして行われている場合は対策についても書かれている。外来生物と一口に言っても、その実態はさまざまである。人間に対して有害な生き物であれば報道機関で取り上げられたり、国を挙げて対策に乗り出したりもしている。その一方、人間にとっては無害である場合や、むしろ有益である場合はあまり対策も立てられず、むしろ「なぜ淘汰しなければいけないのか」という

意見も出ている。なぜ、今になって外来生物の問題が注目されるようになったのか。

そもそも外来生物の定義について、“「明治時代以降に日本に導入された生物種」と環境省によって定められている。「明治時代以降」という線引きがされた根拠は、「明治時代は開国を皮切りに人間の移動や物流が盛んになり始めた時代の節目であるから」とこの本で解説されている。しかし、この定義を踏まえたうえで著者は、“島国である日本では、縄文の時代から人の移入が繰り返されており、その過程で様々な生物が大陸から持ち込まれたと考えられる。つまり、「外来生物」＝「人の手によって移動させられた生物」の歴史はずっと古くから始まっていたといえる”，と自らの考えを述べ、時間がたつことによって「外来生物」から「在来生物」へと扱いが変わるなら問題はないのではないかと疑問を提起している。

そして、その疑問に対する答えとして、冒頭にも書いてあるように“現代の外来生物が問題となっているのはその移動の速度と量にあり、かつてない速度での自然環境の変化の果てに、どのような生態系が待ち構えているのかは、予測不能であり、「何が起るかわからない」ということそのものが大きなリスクと捉え、「現状を維持する」ことが現在考えられる最善策であり、だから外来生物の問題を解決しなければならない”と結論づけている。しかし、このような曖昧な結論では多くの人に納得してもらえないとは思えない。著者はより多くの人に関心を寄せて欲しいと書いていたが、通常は外来生物などほとんど興味のない問題だと考えられるため、誰でも危機感が抱けるような具体的で分かりやすい結論をその道のプロである研究者が導き出し、提示すべきであり、そのためのプロではないだろうかと私（中澤）は考える。

（中澤 文貞）